『ベーシック ジーニアス英和辞典』を使ってみて

芳本泰典

はじめに

編集部から，標題の趣旨の原稿を書く機会をいただいた。

『ジーニアス英和辞典』（初版）発刊以来，ジーニアス＝ファミリーのファンであるので，快くお受けすることにした。僭越ではあるが，辞書について日頃考えていることや『ベーシック　ジーニアス英和辞典』（以下『ベーシック』）を使ってみての感想などを織り交ぜ，読んでいただいている方々に何らかの参考になるよう心掛けながら筆を進めていきたい。

英語教育の現状

2002年７月12日に文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を発表し，2003年３月31日には「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。この壮大な「構想」「計画」に従って，私たち英語教員にも研修が義務付けられ，英検準１級，TOEFL550点，TOEIC730点の数値目標に向かって勉強の機会が与えられることになった。かく言う筆者も，本年度，夏休みを中心にして10日間の研修を受けている。

翻って，学習者に対しても高等学校卒業段階で英検準２級～２級程度を数値目標としている。しかし，この目標とは裏腹に現在英語が苦手な生徒がいかに多いことだろう。筆者の勤務校でも目標を達成できる生徒はごくわずかである。

『ベーシック』のカタカナ表記について

ちょうど１年前，『アクティブ ジーニアス英和辞典』『ジーニアス英和大辞典』『ジーニアス英和辞典』（３版）の刊行が相次ぐ中，『ベーシック』が刊行されることを知った。『ヤング ジーニアス英和辞典』の後継辞書で11年ぶりの改訂だそうだ。実は『ヤング ジーニアス英和辞典』には少し物足りなさを感じていた。初学者向けと銘打ってあるものの，slow learner には使いづらいのではないだろうか，と…。しかし，本誌第31号に掲載された編集主幹の原川博善先生の『ベーシック』の紹介文を読み進めるうちに，このモヤモヤしたものがとれていった。

辞書にしても教科書にしても発音のカタカナ表記がしてあるとありがたい。本年度から，高等学校では，学年進行で新教育課程が実施されているが，文科省検定済教科書の中で slow learner 向けのものにはカタカナ表記を採用しているものが旧課程時よりも格段に増えている。辞書の中にもカタカナ表記があるものもまま見かける。

筆者自身は生徒・学生のころ，発音のカタカナ表記はせず，発音記号を頼りに英語を読むように心掛けてきた。しかし，英語の苦手な生徒を相手にする立場になって感じるのは，発音記号がかえって足手まといになるということである。

いくら英語が苦手な生徒でも「聞くこと」「話すこと」を重視する中学校時代を過ごしてきているので，簡単な生活レベルの語彙は「聞いたり」「口に出したり」できる。全く分からない生徒はほとんどいない。しかし，いったん文字になると

「読んだり」「書いたり」できなくなるのである。発音記号も分からないし，教師のモデルも即座に頭に残らないので，単語の定着率が低い。その点で，文字で「読んだり」「書いたり」できる語彙を増やすための「橋渡し」として，カタカナの役割は大きいと思う。

しかも『ベーシック』には音声学的な事柄をできるだけ除く配慮がしてあることは敬服に値する。よくたとえ話として使われるが，rice と lice の違いは音声学的には重要であり，正しく発音するに越したことはないが，発音が悪くても意味を取り違えることはほとんどないだろう。文脈から十分推測可能であるからである。殊に slow learner に rice と lice の発音上の違いを強調するのは，最初から高いハードルを跳べと言うのと同じである。まずは口に出して言ってみようという気になるかどうかが大切である。

音読について

最近，音読が一種のブームであるが，英語教育の現場でも音読の重要性が強調され，音読を通して英語力がアップしたという研究結果が報告されている。

音読をするためにはまず読み方が分からなければならないが，先に述べたように，発音記号も分からないし，教師のモデルも即座に頭に残らない slow learner に音読指導をするのは一苦労である。教科書によってはカタカナ表記がしてあるものもあるが，新出語に限定されているので，使い勝手がよくない。生徒によって読める語と読めない語がまちまちなために一筋縄ではいかないからである。『ベーシック』を全員に持たせ，読み方を辞書で確認させるのも一案ではあるが，なかなか理想通りにいかない。

筆者の場合は，音読指導の際にはカタカナのルビを付けた音読補助プリントを使うことが多いが，プリント作成の際に『ベーシック』は大変役に立っている。Slow learner が対象なだけに，ルビを振るにも細心の注意を払わなければならないが，簡素な形で表記してあるので使い勝手がよい。

ルビを読むのが目的ではなく，ルビはあくまでも英語を読むための補助的なものに過ぎないので，最終的には音読テストを行うのだが，ルビを頼りに音読練習をし，テストに臨み，何とか読み切ろうとしている生徒の姿を見ていると，プリント作成の苦労も報われる思いがする。

また，ある一定期間このような練習をしていると，自力でルビを振ろうとする生徒が出てきたり，自力で読もうとする生徒も出てくるのはうれしい限りである。

声に出して読めないというコンプレックスから，英語学習からなりを潜めてしまった生徒に光が当たる瞬間である。

おわりに

本稿では『ベーシック』の数多い特長のうちの１つに的を絞り，感想を述べさせていただいた。ジーニアス＝ファミリーのコンセプトは user-friendly だが，これまで見てきたように，『ベーシック』はまさに slow-learner-friendly である。

ここ最近「英語が使える日本人育成」が国家的急務であるような印象を受けるが，現実には英語が苦手な生徒が大多数である。

しかし，『ベーシック』のような slow-learner-friendly な辞書の出現によって底上げを図り，１人でも多くの生徒が，英語が好きになり，また使えるようになればと思う。

最後に，『ベーシック』のはしがきにある印象に残った言葉を引用して筆を置きたい。

「この辞書が，英語の本質(genius)についての理解と英語習得を促し，生来の天分(genius)を引き出し，『使える英語』を学ぶための強力な助けとなることを切に望んでいる。」

（よしもと　やすのり・山口県立広瀬高等学校教諭）